盛岡バッハ・カンタータ・フェライン 35 周年演奏会

イタリア・バロックの煌めき

2012. 2/12 (日)

盛岡市民文化ホール大ホール

ご あ い さ つ

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン
代 表　茂 木 容 子

本日は、お寒い中、またお忙しいところ、ご来場いただきありがとうございます。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン会員一同、心より感謝申し上げます。

私ども盛岡バッハ・カンタータ・フェラインは、この名のとおり、バッハのカンタータを歌う合唱団として発足し、今年35周年をむかえます。35年間というと大変に長いようですが、33年在籍している私でもあっという間だったように感じます。充実した楽しい練習や演奏会を経験したからでしょうか?

創立以来、何もわかっていない(に等しい)アマチュアの私たちに、佐々木正利先生は忍耐をもって手取り足取り、口伝えでバッハの音楽を教えてくださっています。バッハを通して音楽の本質を、そしてそれに取り組む真摯な姿勢を示してくださっていると、毎回の練習で感じるのです。そして、その姿勢はアマチュアでもプロフェッショナルでも同じなのだとも、先生はおっしゃいます。その姿勢を私たちが具現できているかどうかは自己判断できませんが、メンバーは少なくとも同じ方向を向き、そのベクトルは上向きであると思っています。

本日は、そんな佐々木先生と東京藝大時代に「同じ釜の飯を食った」お仲間を中心とする、東京バッハ・カンタータ・アンサンブルを器楽に、また、先生の薫陶を受けて盛岡から巣立ち活躍なさっておられる、声楽家の皆様をソリストにお迎えして演奏いたします。器楽の方々も、声楽ソリストも、日本の音楽界をリードしていらっしゃいます。合唱団は、力不足ではありますが、このような素晴らしい皆様と音楽できる機会を待ち望み、懸命に練習してまいりました。ご来場の皆様にもこの共演する喜びが伝わることを心より願っております。

本日のプログラムには、昨年5月にドイツのローテンブルクとウルムの教会で演奏するはずであった曲が入っております。昨年4月下旬に出発予定だった念願のドイツ演奏旅行を、様々な状況により断念いたしました。私たちが愛して止まないバッハの生まれた国、ドイツで演奏ができることは無常の喜びです。彼が生まれ、生活し、作曲をしたその地で演奏できると考えただけでもうれしいのです。しかしながら、東日本大震災により日本国内の交通も通常運行でなかった4月に、盛岡や岩手県内、仙台在住のメンバーがドイツに演奏旅行することは不可能でした。苦渋の決断をしたものの、ドイツで受け入れにお骨折りくださっていた方々には大変なご迷惑をかけてしまいました。それにもかかわらず、彼らは快く受け止めてくださり、後を受けて現地の合唱団がコンサートを開催し、さらにたくさんの義援金まで集めてくださいました。ただただ感謝するばかりです。被災地のために有効に活用することをお約束してお預かりしました。

演奏旅行の中止を決めた頃は、ともすれば気持ちが落ち込み、目前の生活だけに追われていました。週1回の合唱の練習に来ることで、気持ちを立て直すという毎日だったように記憶しています。火曜日の夜、練習に来て合唱をすることがとてもうれしく、心の支えとなりました。そして、6月にはドイツ演奏旅行帰朝演奏会を予定していたホールで、大震災へのチャリティーコンサートとして「モーツァルト・レクイエム演奏会」を開催し、犠牲者の御霊が安らかとなることをお祈りしました。さらに被害に遭われた方々のために募金を募り、企画を共同主催したIBC岩手放送震災募金に寄附いたしました。

あと1ヶ月で、あの日から1年になります。改めましてお亡くなりになられた方を悼みますとともに、被害に遭われた皆様に心よりお見舞い申し上げます、一日も早く普通の生活が戻ってきますようにと願っております。微力ではありますが、歌に込めた私たちの心からの祈りと願いが届きますように。

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン35周年演奏会
～ イタリア・バロックの煌めき ～

A.ヴィヴァルディ「キリエ」Kyrie RV587
A.ヴィヴァルディ「クレド」Credo RV591
M.コレット「主を誉め称えよ」Laudate Dominum
A.ヴィヴァルディ「マニフィカート」Magnificat RV610
J.S.バッハ「ミサ曲イ長調」A-Dur Messe BWV234

独　唱

【Laudate Dominum】
村元彩夏（S）／上杉清仁（A）／佐々木直樹（B）

【Magnificat RV610】
・Et exultavit　村元彩夏（Sop.1）／上杉清仁（A）／鏡　貴之（T）
・Esurientes　村元彩夏（Sop.1）／金成佳枝（Sop.2）

【A-Dur Messe BWV234】
1. Christe　村元彩夏（S）／上杉清仁（A）／鏡　貴之（T）／佐々木直樹（B）
3. Domine Deus　佐々木直樹（B）
4. Qui tollis peccata mundi　村元 彩夏（S）
5. Quoniam tu solus　上杉 清仁（A）
6. Cum Sancto Spiritu　金成 佳枝（S）／鏡　貴之（T）／佐々木直樹（B）

指　揮

佐々木正利

管 弦 楽

東京バッハ・カンタータ・アンサンブル（コンサートマスター：蒲生克郷）

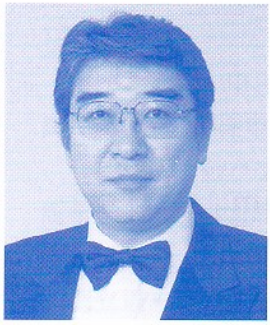
合　唱

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

2012.2/12　15:00　盛岡市民文化ホール大ホール

主　催 / 盛岡バッハ・カンタータ・フェライン　IBC岩手放送
後　援 / 岩手県教育委員会　盛岡市教育委員会　盛岡市文化振興事業団
岩手県合唱連盟　岩手日独協会　岩手日報社

出演者プロフィール



佐々木　正利
（指　揮）

東京藝術大学声楽科卒業。同大学院修士及び博士後期課程修了。須賀靖元（声楽）、服部幸三（音楽学）、小林道夫（演奏法）、森晶彦（発声法）、松本民之助（作曲）、岳藤豪希（宗教音楽）の各氏に師事。
1973年にバッハ「クリスマス・オラトリオ」の福音史家で楽壇デビューして以来、バッハをはじめとする宗教音楽のスペシャリストとして揺るぎない地位を得ている。1979年シュトゥットガルトに渡りL.フィッシャー教授に師事。1980年第6回ライプツィヒ国際バッハコンクール声楽部門第5位入賞。同年より1982年までデットモルト北西ドイツ音楽大学に学び、H.クレッチマール教授に師事。在独中は欧州各国の演奏会に招かれ、特に1980年ウィーン楽友協会ホールでのマタイ受難曲では『若き日のP.シュライヤー』と新聞各紙で絶賛される。

帰国後もライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団、ベルリン交響楽団、国立ブカレスト交響楽団、NHK交響楽団等、世界、日本の著名なオーケストラのソリストとして度々起用され、K.マズア、H.シュタイン、H.ブロムシュテット、小澤征爾、R.シャイー等、世界を代表する数々の指揮者と共演。また宗教音楽の名指揮者として名高いH.リリング、H.J.ロッチュ、M.コルボ、R.ヤコブス等率いる、シュトゥットガルト・バッハ合奏団、ゲヒンゲン聖歌隊、聖トマス教会聖歌隊、RIAS室内合唱団等の演奏会に度々出演し、高い評価を得ている。

特に世界的バッハ指揮者H.ヴィンシャーマン率いるドイツ・バッハゾリステンの演奏会には、ソリストとしてだけでなく自身が育てた合唱団も度々共演し、その歌唱力、合唱指導力によって絶大な信頼を勝ち得ている。

1975年、1985年ザルツブルク音楽祭に招聘され、モーツァルテウム管弦楽団、ベルリン聖ヘドヴィッヒ聖歌隊と、バッハ「マニフィカート」、モーツァルト「戴冠ミサ」を共演し好評を博した。在独中オペラでは、ヴェストファーレン州立歌劇場等で、「コジ・ファン・トゥッテ」のフェランド、「フィデリオ」のヤッキーノ、スカルラッティ「グリゼルダ」のコッラード役で出演。現在までリサイタル29回を数え、レコード・CDも多数リリース、またテレビ、FM等にも度々出演している。

1970年東京藝術大学バッハカンタータクラブの創設に携わり、多くの後進を育てると共に指揮者としての活動を開始。以後約40年に亘って主に宗教曲の演奏に冴えをみせ、そのいずれもが名演の誉れ高い。特に盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、仙台宗教音楽合唱団、岡山バッハカンタータ協会等を率いての20数回に亘るヨーロッパ公演では、『シュッツ、バッハの世界的担い手』とした最大級の賛辞が新聞各紙に掲載され、1993年のヴィンシャーマンとのマタイ受難曲では『マタイ演奏史上、最も特筆されるべき演奏の一つ』、また1995年のJ.ツィルヒ指揮ニュルンベルク交響楽団との天地創造では『音楽と言葉との見事なまでの融合』と、その音楽作りが絶賛された。

1987, 88年には、リリング音楽監督のバッハ・アカデミーにてTen.マスタークラスの講師を務め、またコダーイ・サマースクールや古楽サマースクール等でも指導講師に招かれるなど、その指導力については世界的に定評がある。門下生として世界の歌劇場で活躍する国際的歌手、オラトリオ・リート歌手、大学教授等音楽指導者を多数輩出しており、またコンクール優勝者等も数多い。

1994年長年にわたる顕著な演奏・教育の業績に対し、第47回岩手日報文化賞（学芸部門）が贈られ、また2000年にはアメリカ・イオンド大学より名誉博士号が授与された。また2011年には日独交流150周年を記念して、ドイツ大使館より日独友好賞（功労賞）を受賞した。

現在岩手大学教育学部教授。岩手大学教育学部附属小学校校長。二期会会員。日本声楽発声学会副理事長、日本教育大学協会全国音楽部門大学部会副部会長、日本音楽表現学会会長諮問委員、仙台バッハ・アカデミー理事。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン指揮者。仙台宗教音楽合唱団、岡山バッハカンタータ協会、東北大学混声合唱団、東京21合唱団、岩手大学合唱団、各常任指揮者。山響アマデウスコア音楽監督。二期会バッハ・バロック研究会講師。

プロフィール【ソリスト】

村元　彩夏
(ソプラノI)

青森県五所川原市出身。岩手大学教育学部芸術文化課程卒業。東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程（独唱）修了。現在同大学大学院音楽研究科博士後期課程に在籍。第20回友愛ドイツ歌曲コンクール第一位、文部科学大臣賞受賞。副賞として2010年3月ウィーンにてリサイタルを行う。JT主催アフタヌーンコンサートに出演。朝日新聞社主催第60回「藝大メサイア」のソリストを務める。これまでに、J.S.バッハの教会カンタータ、《クリスマス・オラトリオ》、ヘンデル《メサイア》、モーツァルト、フォーレ、ラター《レクイエム》、メンデルスゾーン《エリヤ》等のソプラノソロを務める。声楽を佐々木正利、朝倉蒼生、秦貴美子、寺谷千枝子の各氏に師事。

金成　佳枝
(ソプラノII)

岩手県滝沢村出身。岩手大学教育学部芸術文化課程音楽コース卒業。現在東京藝術大学音楽学部声楽科に在学中。声楽を佐藤恵津子、佐々木正利、平松英子の各氏に師事。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン会員。東京21合唱団団員。

上杉　清仁
(カウンターテナー)

高知県出身。高知大学人文学部卒業。同大学院教育学研究科音楽教育専修修了。東京藝術大学大学院博士後期課程を修了し博士号(音楽)を取得。スイス政府奨学金、ローム・ミュージック・ファンデーション奨学金を得てスイス・バーゼル音楽大学・スコラカントルムに留学し、ゲルト・テュルク、アンドレアス・ショル両氏のもとで研鑽を積む。しなやかで柔らかい美声と的確な解釈による多彩な表現には定評があり、日本を代表するカウンターテナー歌手として活躍している。バッハ・コレギウム・ジャパン、声楽アンサンブル『ラ・フォンテヴェルデ』各メンバー。桜美林大学総合文化学群非常勤講師。ミューズアート音楽院講師。日本声楽発声学会会員。

鏡　貴之
(テノール)

岩手大学教育学部芸術文化課程卒業。東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程独唱専攻修了。声楽を佐々木まり子、佐々木正利、多田羅迪夫の各氏に師事。主にオラトリオ、宗教曲のソリストとして活動中。特にJ.S.バッハの作品では、《クリスマス・オラトリオ》《ヨハネ受難曲》《ミサ曲ロ短調》や多数の教会カンタータのソロを務め、活動の中心となっている。他にはモーツァルト《レクイエム》、ドヴォルザーク《レクイエム》、《スターバト・マーテル》、ベートーヴェン《第九》など。藝大合唱定期ではブルックナー《テ・デウム》《ミサ曲第3番ヘ短調》のソリストに選ばれる。オペラの分野では、藝大モーニングコンサートでモーツァルト《魔笛》のタミーノ役を務める。これまでにヘルムート・ヴィンシャーマン、ハンス・マルティン・シュナイト、鈴木雅明、ヴォルフ・ディーター・マウラーなどの著名な指揮者と共演して高い評価を得ている。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、東京21合唱団、日本声楽発声学会、各会員。東京バッハ合唱団、東京ムジーククライス合唱団、各ヴォイストレーナー。バッハ・コレギウム・ジャパン、モーツァルト・アカデミー・トウキョウ、各メンバー。

佐々木　直樹
(バス)

岩手大学教育学部卒業後、東京藝術大学音楽学部声楽科を経て、同大学大学院修了。声楽を小原一穂、佐々木正利、佐々木まり子、故伊藤亘行、多田羅迪夫の各氏に師事。藝大在学中は、小林道夫氏のもと藝大バッハ・カンタータクラブに所属し研鑽を積む。おもに宗教曲のソリストとして国内外のオーケストラや合唱団と共演。01年藝大定期メンデルスゾーン『エリア』、02年「藝大メサイア」ソリスト。03年バッハ・コレギウム・ジャパンのメンバーとしてアメリカツアーに参加して以来、多くの演奏会や録音に参加。03～06年、岩手大学教育学部非常勤講師。現在、島根大学教育学部准教授。松江バッハ・カンタータ・フェライン指揮者。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、グルッペ・ベッヒライン、日本声楽発声学会各会員。

テノールのソリストが疾病により鏡貴之氏から沼田臣矢氏に変更になりました。プロフィールは以下の通りです。

沼田　臣矢
（テノール）

岩手県出身。岩手大学教育学部芸術文化過程音楽コースを経て東京藝術大学音楽学部声楽科に在学中。声楽を佐々木まり子、佐々木正利、川上洋司の各氏に師事。第２回東京国際声楽コンクール学生部門入選。

プロフィール【オーケストラ】

東京バッハ・カンタータ・アンサンブル(管弦楽)

東京藝術大学の学内サークルとして活動しているクラブ「東京藝術大学バッハカンタータクラブ」のOBを中心に、卒業後もなおバッハやヘンデル等の器楽曲、宗教音楽の分野に於ける演奏活動を続けようと有志が集ったのが「東京バッハ・カンタータ・アンサンブル」である。メンバーは各自がソリスト、室内楽、オーケストラ等、各方面で活動しているため多少流動的ではあるが、この名称のもとで演奏活動を始めてから既に 25 年を経て、バッハ、ヘンデルを中心としたバロックの器楽曲、宗教音楽の数少ない演奏研究団体として、その様式感に則った生き生きとした演奏には定評がある。

過去においては、W. ヤーコプ、H.ヴィンシャーマン、E.ヴァイアント、H.J. ロッチュ、P. ノイマン、小林道夫、黒岩英臣等、内外の演奏家との共演をはじめ、バッハ合唱団、CMA合唱団等、全国各地の合唱団と共演している。

蒲生　克郷
(コンサートマスター・第1ヴァイオリン)

東京藝術大学卒業。1976～78年渡独。ヒルデスハイム市立歌劇場奏者、ヒルデスハイム室内管弦楽団コンサートマスター等を務める傍ら、ヴュルツブルグ音楽大学にて研鑽を積む。現在、東京藝術大学音楽学部非常勤講師、及び藝大フィルハーモニア(管弦楽研究部)コンサートマスター。エルデーディ弦楽四重奏団、アンサンブルofトウキョウ各メンバー。故多久興、海野義雄、故ボリス・ゴールドシュタインの各氏に師事。

海保　あけみ
(第1ヴァイオリン)

東京藝術大学音楽学部卒業。ヴァイオリンを片岡世界、正岡紘子、山岡耕筰、日高毅各氏に、室内楽を黒沼俊夫、日高毅各氏に師事。藝大バッハカンタータクラブにて小林道夫氏の指導を受ける。現在フリーの演奏家として、バロック時代の器楽曲、宗教曲等の演奏を続ける傍ら、オーケストラや室内楽、スタジオの分野でも活動している。シンフォニア・フォンス・アルモニエのメンバー。尚美学園大学管弦楽団演奏員。

宮崎　桃子
(第1ヴァイオリン)

桐朋女子高等学校を経て、桐朋学園大学を卒業。東京藝術大学大学院修士課程修了。ヴァイオリンを鷲見健彰、恵藤久美子、漆原啓子、バロック・ヴァイオリンを若松夏美の各氏に師事。また大学院在学中、藝大バッハカンタータクラブに所属し、小林道夫氏の指導を受ける。現在、モダン及びバロック・ヴァイオリンの奏者として演奏活動を行うほか、後進の指導に当たっている。東京バッハ・カンタータ・アンサンブルのメンバー。

村津　瑠紀
(第1ヴァイオリン)

東京藝術大学音楽学部附属音楽高校を経て、同大学首席卒業、同大学院修了。福島賞、安宅賞受賞。藝大フィルハーモニア第2ヴァイオリン首席奏者。

川原　千真
（第2ヴァイオリン）

東京藝術大学および同大学院修了。ヴァイオリンを海野義雄、田中千香士、ヴィオラ・ダ・ガンバを平尾雅子に師事。2000,04年、バッハ無伴奏ソナタ・パルティータ全曲演奏会を開催、09年同全曲CD2枚組リリース(バロック・ヴァイオリン)。「古典四重奏団」第1ヴァイオリンとして、97年度村松賞、04年文化庁芸術祭大賞受賞、07年文化庁芸術祭賞受賞。99年ギリシャ公演、05年ドイツ公演。ラ・フォル・ジュルネ、NHK-FMリサイタル等出演。CD11枚リリース。「音楽三昧」のヴァイオリンおよびヴィオラ・ダ・ガンバ奏者としてCD7枚をリリース、02年アメリカ公演、NHK「名曲アルバム」等出演、第7回「サライ大賞」CD、DVD部門賞受賞。アンサンブル《BWV2001》メンバー。

高木　聡
（第2ヴァイオリン）

東京藝術大学音楽学部卒業。これまでにヴァイオリンを小沢真琴、岡山潔、和波孝禧、塚原るり子の各氏に、室内楽を小林道夫、金昌国の各氏に師事。1999年The International Holland Music sessions修了。第九回全日本ソリストコンテストにてベストソリスト賞受賞。東京藝術大学管弦楽部非常勤講師を勤めた後、現在は東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団第一ヴァイオリン奏者。また、ソロ、室内楽、バロックヴァイオリン等多方面で活躍中。

清岡　優子
（第2ヴァイオリン）

神奈川県出身。東京藝術大学を経て、同大学大学院修士課程室内楽専攻修了。また、NHK交響楽団アカデミー修了。第10回日本クラシック音楽コンクール全国大会第3位(1位なし)、第3回Y.B.P.国際音楽コンクール優勝等、多数のコンクールで受賞。Quartett Kreisel（クライゼル）の第1ヴァイオリン奏者として数々の演奏会・音楽祭に出演。第16回原村室内楽セミナーでは最優秀賞を受賞し、奨学金を受ける。現在、横浜市栄区民文化センター「リリス」レジデンスアーティスト・芸術集団2008支援アーティスト・ピアノ大野真由子とのDuo Espoir(エスポワール)として幅広い活動を積極的に行っている。2011年5月には、Duo Espoir 10th Anniversary CD【ESPOCHE】をリリース。東京藝術大学管弦楽研究部非常勤講師（藝大フィルハーモニア ヴァイオリン奏者）。

李　善銘
（ヴィオラ）

東京藝術大学管弦楽研究部講師を長年務めたのち、1996年より名古屋フィルハーモニー交響楽団にてヴィオラの副主席奏者、退職した現在はフリーのヴィオラ奏者、指揮者として活動をしている。東京アカデミー室内合奏団、クロイツ弦楽四重奏団等を経て、現在東京バッハ・カンタータ・アンサンブルを主宰。2002年4月には神戸にて、小林道夫氏との共演でリサイタルを開催、好評を博した。ヴィオラを三輪長雄、故井上武雄、中塚良昭の諸氏に師事。

上ノ山　美香
（ヴィオラ）

6歳よりヴァイオリンを始める。桐朋学園大学音楽学部ヴァイオリン科卒業。同大学研究科終了。アメリカ・ボードウィンサマーミュージックフェスティヴァルにて、ルイス・カプランに師事。ファイナルコンサートに出演。これまでに、浦川宣也、尾花輝代充、小林健二、イヴリー・ギトリスの各氏に師事。現在オーケストラ、スタジオワーク、ソロ、アレンジなどで活動中。

田崎　瑞博
（チェロ）

東京藝術大学卒。ヴァイオリンを桑田晶、兎束龍夫、山岡耕筰、外山滋に師事。在学中「東京藝大バッハカンタータクラブ」に所属、小林道夫の指導を受ける。その後、チェロや各種古楽器を独学し、室内楽を中心に幅広く活動を展開。「古典四重奏団」のチェロ奏者として、97年度村松賞・平成16年度文化庁芸術祭大賞・同19年度優秀賞を各受賞、ギリシア・ドイツ公演、CD10枚をリリース。「タブラトゥーラ」のフィーデル奏者として、欧州、韓国、カナダなどで公演、CD8枚をリリース。アンサンブル「音楽三昧」の編曲者・ヴィオラ・チェロ奏者として、02年アメリカ公演、第7回「サライ大賞」CD、DVD部門賞受賞、CD7枚をリリース。バッハなどの宗教音楽の通奏低音奏者、アンサンブル《BWV2001》では企画・制作とバロックチェロを担当。

豊原　さやか
（チェロ）

東京藝術大学音楽学部器楽科、京都市立芸術大学大学院卒業。大学院卒業後は新日本フィルハーモニー交響楽団団員として1年間活動。2002年フライブルク音楽院（ドイツ）に入学。マインツ州立歌劇場付属オーケストラの研修生を経てフライブルク音楽院ディプロムを取得。2007年帰国。現在、東京バッハ・カンタータ・アンサンブルなどで数多くの宗教曲を、また都内の主要オーケストラにおいてフリーで活動する一方、室内楽やソロの分野でも活躍。これまでにチェロを黒川正三、上村昇、花崎薫、C.ヘンケルの各氏に、また室内楽を河野文明、浦川宜也、R.クスマウルの各氏に師事。

蓮池　仁
（コントラバス）

東京藝術大学卒業。桑田文三、永島義男に師事。東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団コントラバス奏者。アンサンブル「音楽三昧」《BWV2001》メンバー。

阿部　博光
（フルート）

東京藝術大学卒業。元日本フィルハーモニー交響楽団首席フルート奏者。第45回日本音楽コンクールフルート部門入選。文化庁在外研修員として、スイス、バーゼル市に留学。ペーター・ルーカス=グラーフ、レイモン・メラーンの両氏に師事。東京では 10 年連続リサイタルを開催。1999 年より札幌コンサートホールにて阿部博光室内楽シリーズ、リサイタルシリーズを開催。CD「バロック 21」「笛楽」「フルート&ピアノデュオリサイタル」をリリース。札幌市民芸術祭大賞、札幌文化奨励賞受賞。小松昭五、細川順三、三村園子、故小泉剛、故吉田雅夫の各氏に師事。現在、北海道教育大学岩見沢校教授、札幌大谷大学非常勤講師、HBC ジュニアオーケストラ常任指揮者。札幌フルート協会副会長。アジアフルート連盟理事。

丹野　恵美子
（フルート）

1983年生まれ。北海道苫小牧東高校、東京藝術大学卒業。フルートを箕輪早智子、阿部博光、金昌国、細川順三、浅生典子、木ノ脇道元、中野富雄の各氏に師事。
第2回全日本ジュニア管打楽器ソロコンテスト第1位。大学在学中より作曲家の新曲初演、レコーディング、韓国と中国の作曲家の新曲初演や、ツアーに参加。詩と音楽のコラボレーショングループ、VOICESPACE のメンバーとして小室等、谷川俊太郎らと共演。イベントやライヴ時の演奏、アレンジ、作曲、譜面制作も行う。

小畑　善昭
（オーボエ）

東京藝術大学卒業、同大学院修了。第42回毎日音楽コンクール管弦楽部門第3位入賞。1979年より1982年まで東京交響楽団に在籍。のち、1985年まで西ベルリン留学。この間ベルリン・フィルハーモニー交響楽団のエキストラを務める。帰国後、新日本フィルハーモニー交響楽団首席オーボエ奏者を経て、現在母校の教授として後進の指導に当たるかたわら、独奏及び室内楽、また古楽器奏者としても活発な演奏活動を繰り広げている。

寺下　徹
（ファゴット）

立教大学文学部卒業後、東京藝術大学を経て、ミュンヘン音楽大学に留学。音楽学を皆川達夫、指揮法を伴有雄、石丸寛、ファゴットを菅原眸、三田平八郎、クラウス・トゥーネマン、カール・コルビンガーの各氏に、室内楽をゲルノート・シュマールフス、ゲルト・シュタルケの各氏に学ぶ。在独中は、ミュンヘンの放送、歌劇場などのオーケストラに客演。また、ミュンヘン・バッハ合奏団のメンバーとしてヨーロッパ各地を演奏旅行するなど幅広い経験を持つ。帰国後は、指揮者・オーケストラ奏者としてのキャリアを積みながら、放送、リサイタル、ソリストとして多方面で活躍する傍ら、多くの学校から招かれ後進の指導に当たる。現在は、現代の教育現場に馴染みやすい新しい子どもの歌創りに取り組んでおり、音楽教育、作詞・作曲の分野でユニークな活動を行っている。また、全国各地のアマチュアオーケストラ、吹奏楽団、合唱団の指導育成にも携わっている。京都在住。

「Photo　井村重人」

能登　伊津子
（オルガン）

桐朋学園大学音楽学部ピアノ科卒業、グレゴリオ音楽院オルガン本科卒業、同専攻科卒業。オルガンを鈴木雅明、岩崎真実子の各氏に師事。1994年白川イタリアオルガン音楽アカデミーに於てピストイア賞受賞、翌年イタリアピストイアオルガン音楽アカデミーに招待される。同アカデミーに於てL.F.タリアヴィーニ、J.L.ウリオールの各氏に師事。1998年スペイン政府より奨学金を得てダローカ国際古楽セミナーに参加。現在、オルガン、チェンバロ、ルネッサンスハープ奏者として、数多くの演奏会、CD録音に参加している。メディオ・レジストロ、アンサンブル《BWV2001》メンバー。CD『メディオ・レジストロ』他多数リリース。

プロフィール【合唱団】

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン（合唱）

1977年「カンタータを歌う会」として発足。以来、一貫してJ.S.バッハの作品を中心としたドイツ・バロック合唱曲の研究、演奏を行っている。その演奏が、1991年ドイツにおいて「作品の語感、音、そして精神の完熟」という現地新聞の批評を受けるに至るまでには指揮者、佐々木正利のドイツ・バロック音楽に対する卓越した見識に基づく、熱意溢れる指導の積み重ねがあった。佐々木は超一流のエヴァンゲリストとして評価されるその発音、語感、様式感をもう一つのライフワークである合唱団の育成に注ぎ込み、その結果「<言葉が生きる>と<音楽が生きる>とは歌の世界では同義語である」というフェラインの音楽信条が演奏上の身上となるに至ったのである。その後、H.ヴィンシャーマン、H.J.ロッチュ、J.ツィルヒ、岩城宏之、K.マズア、H.リリング等、世界的指揮者との共演を重ね、各指揮者より、特にドイツ・バロック音楽を音楽的かつ人間的に表現できる合唱団として、熱い評価を得るようになった。この評価は、声の充実を追求する合唱団や、古楽器的な歌唱法を駆使して鮮烈な表現を目指す合唱団に与えられるものとは性格を異にする。暖かい音色を基調としながら、音楽の刻々と変化する様相を、その時々に相応しいニュアンスで大胆かつ繊細に、確信を持って表現しきろうとする、あくまで人間バッハへの共感を基調とする合唱団に対してのものなのである。ミュンヘンのヘラクレスザールでハイドンの「天地創造」を演奏する（ニュルンベルク交響楽団）同じ週に、各地教会でア・カペラの小品を歌う。フェラインは、常に盛岡の教会での練習で培ったトーンを原点として活動してきた。2010年1月、盛岡においてH.リリング指揮、オーケストラ・アンサンブル金沢による管弦楽との共演でバッハ「ミサ曲ロ短調」を演奏し大きな感動を呼んだ。昨年5月には有志によりドイツ・ローテンブルク等での演奏旅行を計画していたが、東日本大震災の影響により中止のやむなきに至った。その後6月に、震災チャリティーコンサートとして、モーツァルト・レクイエムの演奏会を行った。

「イタリア・バロックの煌めき」鑑賞の手引き

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン
コンサートマスター　佐々木幹雄

「イタリア・バロックの煌めき」演奏会にようこそ!

15世紀の十字軍の遠征などで経済力を蓄えたイタリア商人たちは中世的なキリスト教世界よりも、人間の生を充実させ人生の美を謳歌するという現世肯定的な生き方を選んでいきます。「ルネサンス文化」です。音楽においても、他のジャンルに多少遅れはしたものの16世紀に入るとそれまでのフランドル地方[注1]からイタリア地方に中心を移しながら、「美しさ」とりわけ「調和(ハルモニア)の美」が追求されるようになりました。

17世紀に入るとさらに、美よりも迫真性、調和や優美さよりも動きの激しさによって「表現すること」がめざされるようになっていきます。その中からモノディ様式[注2]や通奏低音書法[注3]、コンチェルト[注4]の形式などが生み出されていきました。「バロック音楽」[注5]の始まりです。テキスト(歌詞)のもつ人間の情動的な内容を音楽が「不協和音」によって表現すること、「動き」や「変化」によって器楽に生命力と彩りを与えること、こういった「表現」のエネルギーによってバロック音楽は声楽・器楽ともに爆発的に広がっていったのでした。

イタリアでは当初、フィレンツェ[注6]で組織された「カメラータ」[注7]という音楽サークルがモノディ様式を生み出して新しい音楽の潮流を創り出しました。しかしその後は当時すでにヨーロッパの観光地となっていたヴェネツィア[注8]で活発な音楽活動が展開されるようになりました。その中心はサン・マルコ大聖堂[注9]です。A. ガブリエリ[注10]やG. ガブリエリ[注11]が複合唱様式[注12]を確立し、さらにC. モンテヴェルディ[注13]が独唱声部を際立たせることでオペラの充実へと道を拓いていったのでした。

このように人間の生を賛美し、生きることの素晴らしさを表現するイタリアのバロック音楽を、本日はごゆっくりとお楽しみ下さい。

【第1部】

○アントニオ・ヴィヴァルディ(イタリア Antonio Vivaldi 1678-1741)

ヴィヴァルディは「アドリア海の真珠」と呼ばれるヴェネツィアの町に生まれ、一時マントヴァやローマに滞在しましたが、生涯のほとんどをヴェネツィアで過ごしました。初めは聖職者となり、しだいにヴァイオリンの名手として、さらには音楽教師や作曲家として知られるようになりました。

若い頃は、ピエタ養育院[注14]の音楽学校のヴァイオリン教師となり、女子たちに合唱や器楽演奏などの音楽教育を行っていました。この養育院の音楽のレベルの高さは当時ヨーロッパ各地に知れ渡っていて、デンマークの国王などもヴェネツィアを訪れるなりすぐにその演奏会を聴きにいった[注15]そうです。また、彼が作曲した楽曲もその多くが出版されたことでヨーロッパ中に広まり[注16]、人気が高まりました。

非常に多作な音楽家で、後半生ではオペラを40曲以上も作曲していますが、もっとも多いジャンルは協奏曲で500曲近くが残されています。独奏楽器のための協奏曲、二重協奏曲、合奏協奏曲、2群のオーケストラのための協奏曲…と、ヴァリエーションに富んでいます。そのため、音楽史的には協奏曲のジャンルの充実・発展に寄与したと位置づけられています。

《キリエ (Kyrie)》 RV587[注17]

二重合唱と弦楽合奏のために作曲された3楽章から成る祈りの曲です。テキストは「ミサ通常文」[注18]の最初の部分が使われています。

第1楽章(「主よ、憐れみ給え」Adagio[注19])の冒頭はト短調の和音で始まる13小節のテーマ(主題)です。このテーマは合唱の歌い出しにも再び登場します[注20]。2群のオーケストラと二重合唱が掛け合いながら音の厚みを増しつつ、力強く曲を終えます。

第2楽章(「キリストよ、憐れみ給え」)は一転してAllegro[注21]で4/4拍子。2つの合唱のソプラノとアルトがデュエットしながら掛け合いを進めていきます。

第3楽章(「主よ、憐れみ給え」)はAdagioでホモフォニックに[注22]歌い出されますが、すぐにAllegroになります。「Kyrie eleison」と畳みかけて歌われるテーマと、長い音符を基本とした半音階上行音形の「eleison」のテーマが絡み合うポリフォニックな音楽です。後者のテーマはJ. S. バッハが後に《ヨハネ受難曲》BWV245の中心部分の合唱に使ったとされています。

《クレド　(Credo)》 RV591

「ミサ通常文」の中の「信仰宣言」の部分をテキストとした混声四部合唱と弦楽合奏のために作曲されており、4つの楽章から成っています。

第1楽章はホ短調3／4拍子で十六分音符を基本としたAllegroで始まり、最後まで基本的には変わりません。その中で、さまざまな面から神である主を「私は信じます。」という信仰の宣言がくり返されます。

第2楽章は一転してAdagioで4／4拍子です。ホ長調の和音で始まり、聖霊によって処女マリアから生まれ出て人となった神秘が、《キリエ》冒頭のテーマとともに歌われます。

第3楽章はイ短調4／4拍子でLargo[注23]に変わります。短いながら、私たちのために受難され葬られたイエスの苦しみや人々の悲しみを表現します。

第4楽章は第1楽章の曲想に戻ります。イエスが復活し神の王国が来ることについての信仰を、力強く宣言します。

○ミシェル・コレット（**フランス　Michel Corrette 1707-1795**）

コレットはノルマンディー地方のルーアンに生まれ、30歳頃から40年以上の間パリにあるイエズス会の大学で、その後フランス東部のアングレームでオルガニストを務めました。また、さまざまな楽器のための曲を作曲したり、それらのための教則本[注24]を書いたりもしています。

コレットの生きたアンシャン・レジームの時代、パリでは公開演奏会や私的な演奏会が急増していました。「コンセール・スピリチュエル」[注25]という団体は、宗教音楽と器楽を中心として演奏会を開催しました。1730年以降は冬には週2回、夏には週1回の演奏会を革命まで続けていました。このプログラムの中にヘンデル、ハイドン、モーツァルト、ヴィヴァルディなどの作品が登場し、フランス音楽界に紹介されていきます。

《主を誉め称えよ　Laudate Dominum》

1768年に作られたこの曲の作曲の経緯は詳しく知られていません。器楽の構成はフルート2、オーボエ、バスーン(ファゴット)、ホルン2、弦楽合奏、オルガン（本日はホルンのパートもオルガンが演奏します）です。声楽はソプラノ、カウンター・テノール、バリトンの独唱と、ソプラノ、アルト、テノール、バリトン、バスの混声5部合唱となっています。

全部で5楽章から成っていて、楽想の基本は A. ヴィヴァルディ作曲の《ヴァイオリン協奏曲　四季》の中の「春」から採られています。テキストは「天と地にあるすべての造られたもの、主をほめたたえよ」という旧約聖書の詩篇148篇が使われています。宗教的な詩篇と世俗的な協奏曲との結びつきは一見奇異に感じますが、ヴィヴァルディの《四季》にはその総譜の随所に情景を描写する言葉[注26]が書き込まれています。この情景描写句はそれぞれの音型が表している様子を示しているのですが、全体としてそれらは自然のすばらしさやそこで暮らす人々の生を賛美するものとなっています。音楽はもちろんのことこれらの言葉も合わせて「天と地にある全ての造られたもの」の喜びを表現するのに値する楽想と、コレットは考えたのではないでしょうか。詩篇の言葉がそれにふさわしい曲想に乗せて表現されます。

第1楽章はソプラノ独唱です。Andante [注27]で3／8拍子のホ短調で始まります。ソプラノの旋律に2つのフルートが寄り添います。「天より主を賛美せよ、天使たちよ、主の軍勢よ、主を賛美せよ」と天上における全ての造られたものに賛美を訴えます。

第2楽章は Adagioで静かに開始された後、ヴィヴァルディの「春」冒頭の旋律(Allegro)に乗せて合唱と独唱が「造られたことの喜び」を歌い上げます。

第3楽章は自然の激しさを表す器楽伴奏[注28]とともに冒頭から合唱が登場します。「春」の第1楽章の後半の楽想が使われています。ソプラノ独唱と合唱による協奏曲とも言える構成です。

第4楽章は Largoで3／4拍子です。「春」の第2楽章の音楽に乗って初めはカウンター・テノールが、続いて合唱が地上の全ての造られたものに「主の名を賛美せよ」と呼びかけます。

第5楽章では「春」の第3楽章が使われています。Allegro の12／8拍子の田園曲[注29]です。木管二重奏

とソプラノ独唱で始まり、続いて全奏で今度は地上に生きる人間に「主を誉め称えよ」と呼びかけます。生きることの喜びに溢れる曲です。

【第2部】

○アントニオ・ヴィヴァルディ

《マニフィカト　Magnificat》RV610

「マニフィカト」とは、新約聖書（ルカによる福音書 第1章第46-55節）にある「マリアの賛歌」と呼ばれるもので、イエスを身ごもったマリアがザカリアの妻エリザベトのもとを訪ねた際に、聖霊に満たされたエリザベトがマリアを祝福した言葉を聞いて、マリアがその喜びを歌った歌です。内容は、処女マリアが主によって救い主を身ごもったことの喜び、全能の神(主)の偉大さ、イスラエルの民の救済の確信、そして三位一体の祈り[注30]です。カトリックの典礼では毎日の晩歌（夕べの祈り）の最後に歌われるよう定められているそうです。

9つの楽章から成っています。どの部分も、短いながら歌詞の内容を的確に表現する曲想になっています。

第1曲は《キリエ (Kyrie)》RV587の冒頭の主題が使われています。Adagio 4／4拍子。

第2曲はソプラノ、アルト、テノールと続く独唱の途中に「全ての（世代の人々が）」と強調するように合唱が呼びかけます。

第3曲は一転して Andanteハ短調でポリフォニックな音楽となります。半音階進行が特徴です。

第4曲では Presto[注31]3／4拍子となり、主の力強さが表現されます。

第5曲は全奏によるユニゾンです。「引きずり下ろす」は下行音型が、「高める」は上行音型が使われています。

第6曲はソプラノによる二重唱です。主が「良いもので満たしてくださる」ことの喜びが歌われます。

第7曲は短いながら、Largo、Allegro、Adagio と変化しながら救済の確信が表現されます。

第8曲は3声部による合唱です。喜びに沸き立っている様子が Allegro で歌われます。

第9曲は第1曲の曲想の変奏で始まり、ホモフォニックな Andante を経て、Allegro で「いつの世までも永遠に。アーメン」とエネルギッシュなポリフォニーが展開されます。

○ヨハン・ゼバスティアン・バッハ（ドイツ　Johann Sebastian Bach 1685-1750）

1685年にドイツ中部の町アイゼナハに生まれたバッハは器楽曲、クラヴィーア[注32]曲、オルガン曲、独唱曲、合唱曲…と多くの楽曲で知られています。ヴァイマル時代[注33]にはヨーハン・エルスンスト公子がオランダから持ち帰った最新の協奏曲を鍵盤楽器用に編曲するよう依頼されヴィヴァルディ作曲《調和の霊感》op.3の数曲を、またライプツィヒ時代[注34]にも《4台のチェンバロと弦楽合奏のための協奏曲》BWV1065に編曲しています。これらの作業を通して、バッハはヴィヴァルディから協奏曲形式を学んだと言われています。

一方で、プロテスタントであるルター派教会の音楽家として多くの教会カンタータ[注35]を作曲し演奏しました。38歳で新に移り住んだライプツィヒ市のトーマス・カントル[注36]となってからは、教会暦に合わせて5年分のカンタータを残したと伝えられています。[注37]それらのカンタータの中にもヴィヴァルディの楽曲から学んだことがバッハによって深められ発展した形で生かされています。

バッハの生きた時代のルター派教会では、特別な機会の礼拝で「キリエ」と「グローリア」が必要とされていました。バッハはその多くを、以前に作曲したカンタータを「パロディ」と今日呼ばれる手法[注38]で編曲することで礼拝に供していました。今日では、4曲残されているこれらのミサ曲を「カンタータ風ミサ曲」と呼んでいます。これらはドイツ語によるカンタータに由来する楽曲を元にしており、歌詞がいくつかのグループに分けられている、「キリエ」の全体及び「グローリア」冒頭は合唱曲、「グローリア」の中間部は3つに分けられて独唱や二重唱のアリア、最後の「クム・ザンクト・スピリトゥ」は合唱曲、といった共通の特徴をもっています。

《ミサ曲イ長調　A-Dur Messe》BWV234

1738年頃にライプツィヒで成立しました。第2、4、5、6曲は原曲が明らかになっており、第1、3曲も旧作からの転用と考えられています。器楽編成はフルート2、弦楽合奏、通奏低音。声楽はソプラノ、アルト、バスの独唱と4声部の合唱です。

第1曲「キリエ」はフルート二重奏、3／4拍子で始まります。付点のリズムが優雅なダンスを思わせます。中間部の「クリステ・エレイゾン」はアリオーソ[注39]のような曲想をもっています。本日はソリストが歌います。続く「キリエ」は Vivace[注40] 3／8拍子の活発な合唱フーガとなります。

第2曲「グローリア」は4／4拍子 Vivace で輝かしい音楽(合唱)が基本となっています。途中に3／4拍子 Adagio でソロが3回挟まれます。最後は主への感謝を、堂々とした3／4拍子 Adagio の合唱で歌い上げます。BWV67の第3曲が原曲です。

第3曲「ドミネ・デウス」は4／4拍子の Andante で、ヴァイオリンのオブリガート[注41]を伴ったバスの独唱です。主なる神とその独り子イエス・キリストを讃えます。

第4曲「クイ・トリス」は通奏低音のつかないソプラノのアリアです。ユニゾンの弦楽の上で2つのフルートのオブリガートがデュエットし、ソプラノが独唱で切々と祈ります。原曲はBWV79の第2曲です。

第5曲「クオニアム」では、ユニゾンの弦楽がオブリガートを担当し、アルトが独唱で唯一の神を賛美します。ニ長調で6／8拍子の快活な音楽です。原曲はBWV79の第2曲です。

第６曲「クム・サンクト・スピリトゥ」は全奏による Grave[注42]4／4拍子で華々しく開幕します。直後から Vivace 12／8拍子の華麗なフーガが展開されます。BWV136の冒頭の合唱曲を原曲としています。

2012 02/03

［注］

01…今日のオランダ南部からフランス北部にかけての大西洋沿岸部。

02…通奏低音による単旋律の伴奏つき独唱歌曲の様式。

03…低声部の旋律と、その上で響かせる即興的な和音を数字などで示す記譜法。「バッソ・コンティヌオ」「ゲネラルバス」とも呼ばれる。

04…独奏と全奏、器楽合奏と合唱、2つの演奏体同士など、対比の原理にもとづいて演奏者が協奏的に演奏する様式。

05…ポルトガル語で「いびつな真珠」を意味する言葉がもとになっていて、後世から見て誇張や過度な装飾と感じられた1600―1750年頃の音楽の傾向。

06…イタリア中部トスカーナ地方の都市。メディチ家の宮廷のあったところ。

07…16世紀の終わり頃の芸術家集団。古代の精神を重んじ、音楽的には単声音楽の再興をめざした。

08…「アドリア海の真珠」「水の都」などの別名もある、アドリア海ヴェネツィア湾の潟に発展した、運河の都。英語では「ヴェニス」。

09…ヴェネツィアで最も大きな教会。司教座聖堂ではなくヴェネツィア共和国元首(ドージェ)の個人礼拝堂だが、実質的にはヴェネツィア市民の教会。

10…アンドレア・ガブリエリ(1510頃―1586)。サン・マルコ大聖堂のオルガニストをつとめた。

11…ジョヴァンニ・ガブリエリ（1553頃―1612）。アンドレアの甥でオルガニストの後を継いだ。プレトリウス、スウェーリンク、H. シュッツなどがジョヴァンニに学んでいる。

12…2群の合唱による交互合唱の様式。サン・マルコ大聖堂の構造や2台のオルガンがあったことが発展の契機となった。

13…クラウディオ・モンテヴェルディ(1567―1643)。1613年から亡くなるまでサン・マルコ大聖堂の楽長をつとめ、器楽奏者や聖歌隊を拡充した。

14…養育院とは身寄りの無い年少の女子を収容した施設でオスペダーレという。ヴェネツィアには4つのオスペダーレがあり、そこでは音楽が正式な教育科目となっていて、ピエタ養育院が最も充実した音楽活動を行っていた。

15…デンマーク王フレデリック4世。1708年のこと。

16…楽譜の出版は、それまでヴェネツィアで盛んだったが、この頃からアムステルダムのロジェ社やル・セーヌ社が銅版印刷という新しい技術で鮮明な楽譜を仕上げるようになり、ヴィヴァルディもこちらを利用するようになった。

17…Ryom-Verzeichnis(リュオム番号)の略で、デンマークの音楽学者ペーター・リュオムによる、ヴィヴァルディ作品の整理番号。ジャンル別・調性順になっている。

18…ローマ・カトリック教会のミサで用いられる典礼文のうち、教会暦によって変化することなく、必ず用いられる式文。「キリエ(憐みの賛歌)」「グローリア(栄光の賛歌)」「クレド(信仰宣言)」「サンクトゥス(感謝の賛歌)」「アニュス・デイ(平和の賛歌)」から成る。

19…「アダージョ」。「ゆったりと遅く」「慎重に」を意味するイタリア語がもとになっている、音楽の発想を表す記号。

20…このほかに、本日のプログラムの《クレド》の第2楽章や《マニフィカト》の冒頭などでも聴かれる。

21…「アレグロ」。「陽気に」「楽しく」「明るく」「軽く」を意味するイタリア語がもとになっている発想記号。

22…一つの主旋律を他の声部が和音的に伴奏する様式、「ホモフォニー」のように。

23…「ラルゴ」。「幅の広い」を意味するイタリア語がもとになっている発想記号。

24…ヴァイオリン、チェロ、コントラバス、フルート、リコーダー、クラヴサン、ハープ、マンドリン、声楽など20近い楽器の教則本を書いた。

25…「楽聖演奏会」を意味する名称。1725年に教会暦に従って劇場が閉鎖される日に宗教音楽の公開演奏会を開催することを目的としてパリで初めて結成された団体。

26…これらの言葉を連ねると4連からなる詩になる。《四季》の4つの楽曲にはそれぞれ詩が添えられている。ちなみに「春」の詩は次のようなものである。

「春がやってきた
小鳥達が陽気な歌で春に挨拶する
西風の息吹に泉は、
優しくささやきながら溢れ流れる

大気を黒いマントで覆いつつ、稲妻と雷鳴が選ばれ、
春の訪れを告げにやってくる
嵐が静まると小鳥達は、うっとりするような歌を再び奏で始める

そして花咲く心地よい野では、
草木の葉ずれの親し気なささやきに、
牧者が忠実な犬を傍らにまどろむ

田園風バッグパイプの陽気な調べに合わせ、
ニンフと牧者はお気に入りの場所で、
まばゆい春の訪れに踊る」

27…「アンダンテ」。「前に進む」「移動する」を意味するイタリア語がもとになっている発想記号。

28…前注の詩の第2連にある、稲妻や雷鳴を表す。

29…「バストラーレ」とも呼ばれる。

30…「父と子と聖霊に栄光あれ…」と唱える。「栄唱(ドクソロジア)」とも言われます。

31…「プレスト」。「早い」を意味するイタリア語がもとになっている発想記号。

32…鍵盤楽器のこと。

33…1708年から1717年までの時期。編曲を依頼されたのは1714年のこと。

34…1723年から、没する1750年まで。編曲したのは1730年頃と考えられている。

35…器楽伴奏つきの独唱や合唱で構成されている組曲で、ルター派教会の礼拝における説教のための音楽として作曲されたものの総称。

36…聖トーマス教会附属学校の教師兼ライプツィヒ市の音楽監督。ライプツィヒ市の4つの主要教会全ての音楽上の責任を負っていた。

37…バッハの次男と弟子による『故人略伝』によると、バッハは5年分のカンタータを残したとされている。1年分でおよそ60曲なので、この記述によれば300曲ほどが作曲されたと考えられる。

38…バッハにあっては、既に作曲していた声楽曲の歌詞を差し替えたり、場合によってはその音楽も変更した歌詞をより良く表現するために書き直したりして、新しい楽曲とすること。

39…独唱や重唱のうち、テキストを語るような楽曲「レチタティーヴォ」と、旋律に乗せてテキストを歌う「アリア」の中間的な様式。

40…「ヴィヴァーチェ」。「生きている」「活力のある」「生き生きとした」を意味するイタリア語がもとになっている発想記号。

41…高音の楽器で旋律的に付けられる伴奏。

42…「グラーヴェ」。「重大な」「深刻な」を意味するイタリア語がもとになっている発想記号。

歌詞対訳

A.Vivaldi
Kyrie

Kyrie eleison.
Christe eleison.
Kyrie eleison.

A.ヴィヴァルディ
憐れみの賛歌

主よ、憐れみください。
キリストよ、憐れみください。
主よ、憐れみください。

A.Vivaldi
Credo

Credo in unum Deum.
Patrem omnipotentem,
Factorem caeli et terrae,
visibilium omnium et invisibilium.
Et in unum Dominum Jesum Christum,
Filium Dei unigenitum.
Et ex Patre natum ante omnia saecula.
Deum de Deo, lumen de lumine,
Deum verum de Deo vero.
Genitum, non factum, consubstantialem Patri:
per quem omnia facta sunt.
Qui propter nos homines,
et propter nostram salutem
descendit de caelis.

Et incarnatus est de Spiritu Sancto ex Maria Virgine:
Et homo factus est.

Crucifixus etiam pro nobis:
sub Pontio Pilato passus, et sepultus est.

Et resurrexit tertia die, secundum scripturas.
Et ascendit in caelum:
sedet ad dexteram Dei Patris.
Et iterum venturus est cum gloria,
judicare vivos et mortuos:
cujus regni non erit finis.

Et in Spiritum Sanctum, Dominum, et vivificantem:
qui ex Patre Filioque procedit.
Qui cum Patre et Filio simul adoratur, et conglorificatur:
qui locutus est per Prophetas.
Et unam sanctam catholicam et apostolicam Ecclesiam.
Confiteor unum baptisma in remissionem peccatorum.
Et exspecto resurrecationem mortuorum.
Et vitam venturi saeculi.

Amen.

A.ヴィヴァルディ
信仰宣言

私は唯一の神を信じます、
全能の父を、
天と地の創造主、
見えるもの全てと見えないもの全ての創造主を。
また 唯一の主であるイエス・キリスト、
神の独り子を私は信じます
父より、世の全てに先立って生まれた方を。
神からの神、光からの光、
まことの神からのまことの神を。
主は 創られたのではなく、生まれ、父と同質であり、
自分を通して全てを創りました。
主は 私たち人間のため
そして 私たちの救いのために
天から降りて来ました。

そして 聖霊によって乙女マリアから肉を得て、
人となりました。

さらには 私たちのために十字架につけられ、
ポンティオ・ピラトのもとで苦しみを受け、そして葬られました。

そして 聖書のとおりに三日目に甦り、
天に昇り
父の右に座りました。
そして再び栄光と共にやって来ます、
死者と生者を裁くために。
主の国には終わりがありません。

預言者を通して語ってきた方を。
そして 主なる命の与え主なる聖霊を私は信じます。
父と子から現れ出で、
父と子と共に拝まれ、崇められ、
そして 唯一の、神聖な、普遍な、使徒に連なる教会を私は信じます。
罪の赦しのために唯一の洗礼を私は認めます。
そして 死者たちの甦りを私は期待し
来る世の生命を私は待ち望みます。

アーメン。

M.Corretto

Laudate Dominum

Psalmus 148

Laudate Dominum de caelis;
laudate eum in excelsis.
Laudate eum, omnes angeli ejus;
laudate eum, omnes virtutes ejus.
Laudate eum, sol et luna;
laudate eum, omnes stellae et lumen.
Laudate eum,
caeli caelorum et aqua quae super caelum est.
Laudent nomen Domini.
quia ipse dixit et facta sunt;
ipse mandavit et creata sunt.
Statuit ea in saeculum
et in saeculum saeculi praeceptum posuit et non praeteribit

Laudate Dominum de terra
dracones et omnes abyssi.
Ignis, grando, nix, glacies,
spiritus procellarum quae faciunt verbum eius

Montes et omnes colles,
ligna fructifera et omnes cedri,
Bestiae et universa pecora,
serpentes et volucres pinnatae,
Reges terrae et omnes populi,
principes et omnes iudices terrae
Iuvenes et virgines,
senes cum iunioribus;
Laudent nomen Domini

Quia exaltatum est nomen eius solius
Confessio eius super caelum et terram
et exaltabit cornu populi sui.
hymnus omnibus sanctis eius
filiis Israel, populo adpropinquanti sibi
Alleluia

M.コレット

主を誉め称えよ

詩編148編

天より主を賛美せよ
高きところで主を賛美せよ
主の全ての御使いよ、主を賛美せよ
主の全ての軍勢よ、主を賛美せよ
太陽よ、月よ、主を賛美せよ
全ての星よ、光よ、主を賛美せよ
主を賛美せよ
天の天よ、天の上にある水よ、
主の名を讃美せよ、
主は自ら語って作り、
自ら命じ、創造したのだから。
主はそれらを永遠に定め
世々限り無く続く、絶対の掟を与えた。

大地から主を讃美せよ
竜よ、すべての深淵よ
火よ、雹よ、雪よ、氷よ
主の言葉を実行する嵐の霊よ

山々よ、すべての丘よ
実のなる木々よ、すべての杉よ
獣よ、すべての家畜よ
地を這う蛇よ、翼のある鳥よ
地上の王よ、諸国の民よ
君主よ、地上の審判者よ
若い男も女も
老人も子供も
主の名を讃美せよ。

主の名は唯一の高みにあり
主の威光は天と地の果てまで及ぶ。
そして主は自分の民の角を高く掲げる、
主のすべての聖者、
イスラエルの子ら、自分の近くの人々の賛歌をも。
アレルヤ。

歌詞対訳

A.Vivaldi
Magnificat

Magnificat anima mea Dominum

Et exsultavit spiritus meus in Deo salutari meo.
Quia respexit humilitatem ancillae suae;
ecce enim ex hoc beatam me dicent
Omnes generationes.

Quia fecit mihi magna
qui potens est, et sanctum nomen eius.

Et misericordia a progenie in progenies
timentibus eum.

Fecit potentiam in brachio suo,
dispersit superbos mente cordis sui.

Deposuit potentes de sede
et exaltavit humiles.

Esurientes implevit bonis
et divites dimisit inanes.

Suscepit Israel puerum suum
recordatus misericordiae suae.

Sicut locutus est ad Patres nostros,
Abraham et semini eius in saecula.

Gloria Patri, gloria Filio,
et Spiritui Sancto,
Sicut erat in principio et nunc et semper
et in saecula saeculorum.

Amen.

A.ヴィヴァルディ
マニフィカート

私の魂は主をあがめます。

そして 私の霊は自分の救いである神を喜び讃えます。
なぜなら 主はこの卑しい下女にも目を留めてくれたのですから、
見なさい、今から後 いつの世の人々も
私を幸いな女と言うでしょう。

なぜなら この力ある、神聖な名の方が
私に大きな事をしてくれたのですから、

その憐れみは世から世へと
主を畏れる人々に及びます。

主はその腕で力をふるい、
思い上がった者たちを打ち倒します。

主は権力ある者をその座から引きずり下ろし
身分の低い者を引き上げてくれます。

主は飢えた人々を良い物で満たし
裕福な人々は空腹なまま追い返します。

主は自分の僕イスラエルを受け入れ
その憐れみを忘れることがありません。

私たちの先祖に語ったように、
アブラハムとその子孫に対して永遠に。

父と子と
聖霊に栄光がありますように、
初めにあったように、いまも、いつも、
永遠に限り無く。

アーメン。
(『ルカによる福音書』第1章46～55節と小栄唱)

J.S.Bach
A-Dur Messe

Kyrie

Kyrie eleison.
Christe eleison.
Kyrie eleison.

Gloria

Gloria in excelsis Deo.
Et in terra pax hominibus bonae voluntatis.
Laudamus te. Benedicimus te.
Adoramus te. Glorificamus te.
Gratias agimus tibi
propter magnam gloriam tuam.

Domine Deus, Rex caelestis, Deus Pater omnipotens.
Domine Fili unigenite, Jesu Christe.
Domine Deus, Agnus Dei, Filius Patris.

Qui tollis peccata mundi, miserere nobis.
Qui tollis peccata mundi, suscipe deprecationem nostram.
Qui sedes ad dexteram Patris, miserere nobis.

Quoniam tu solus sanctus,
Tu solus Dominus,
Tu solus altissimus, Jesu Christe.

Cum Sancto Spiritu in gloria Dei Patris.
Amen.

J.S.バッハ
ミサ曲イ長調

憐れみの賛歌

主よ、憐れみください。
キリストよ、憐れみください。
主よ、憐れみください。

栄光の賛歌

高き所では神に栄光がありますように。
地では 心善き人々に平和がありますように。
私たちはあなたを賛美します。あなたを祝福します。
あなたを崇拝します。あなたを賞賛します。
私たちはあなたに感謝します
あなたの大いなる栄光のゆえに。

主なる神、天の王、万能の父なる神よ、
主なる独り子、至高なるイエス・キリストよ、
主なる神、神の子羊、神の子よ。

世の罪を取り除く方よ、私たちを憐れみください。
世の罪を取り除く方よ、私たちの祈りをお聞き入れください。
父の右に座す方よ、私たちを憐れみください。

ただ あなただけが神聖であり、
ただ あなただけが主であり、
ただ あなただけが至高者なのですから、イエス・キリストよ。

あなたは聖霊と共に 父なる神の栄光の内に。
アーメン。

（仙台宗教音楽合唱団：若林敦盛）

『希望の光 ～ 歩みを進めよう、未来へ』

佐々木正利

あの忌まわしい大震災から昨日で11ヶ月が経ちました。私たちは昨年6月に、「東日本大震災の犠牲者に捧ぐ、モーツァルト・レクイエム演奏会」と題して魂の追悼を祈りましたが、心の傷、苦しみはそう簡単に消え去るものではありません。それだからこそ、私たちのメッセージは1回きりで終わらせることなく、心からの想い、願いとして恒久的に発信し続けることが大切なのではないでしょうか。

私たちができる発信は何でしょうか。それを考えますと、やはり歌に気持ちを込めて被災者に送り届けることしかありません。私たちは、昨年の演奏会で沿岸の被災された方々をご招待し、亡くなられた方のご冥福を祈り、残された方々への慰めを祈念しました。この祈りは、まだ私たちの心のなかにあり続けていますが、本日は新たな想い、様相の発信としました。すなわち、昨年が慰めの祈りであったのに対して、今回は励ましの祈りのプログラムとしたのです。

突然ですが、中国古代の学説「五行説」では、ライフサイクルを青春・朱夏・白秋・玄冬と分けています。「論語」と照らし合わせてみます。

[年代]	[論語]
① 青春：16歳～30代前半	志学（学を志す）
② 朱夏：30代前半～40代後半	而立（身を立てる）不惑（惑わず）
：40代後半～50代後半	知名（天命を知る）
③ 白秋：50代後半～60代後半	耳順（耳に従う）
④ 玄冬：60代後半～	従心（矩を超えず）

このうち、「青春」は緑の時期。若者が未熟さからの脱却を図り、徐々に熟し勢いを増していき、両親や周りの人たちの支援を受け、勉学に勤しみ、社会に出て、新しい自分の家族を起こし、ひとり立ちをするための準備の年代です。希望に胸を膨らませる一方、挫折感に苛まれながら自分の活きる道を試行錯誤する年代が青春なのです。

私たち盛岡バッハ・カンタータ・フェライン（以下フェラインと略）の有志は、岩手大学合唱団らと共に、3月20日、中華民国は台北の中正国家音楽廟で、私たちの盟友G.シュマールフス氏が音楽監督を務めるエヴァーグリーン交響楽団とマーラーの交響曲第2番「復活」を演奏します。マーラーの音楽は、人間の生々しいおどろおどろしさ、神の救いを希求してやまない精神世界との究極の対比、その混沌(カオス)のなかで奏でられるのですが、この曲の第5楽章のはじまりで、すべてのものが破壊されカタストロフィを迎えたのち、世界に静寂が訪れ、あちこちから木々の新しい生命が芽生え、散り散りになっていた小鳥のさえずりが戻ってくる。そのしじまのなか、合唱がアカペラ（無伴奏）で Aufersteh'n, ja aufersteh'n（復活する、そうだ、復活するのだ!）と、茫洋と地の底からpppで歌い出すさまに身を浸すと、言いようのない深い感動に包み込まれるのです。そこから、クロプシュトックの賛歌『復活』に従ってマーラーが解題した力強い歌詞が、クライマックスに向かって歌われ昇華していきます。

特に、次の歌詞、

Was entstanden ist, das muß vergehen. Was vergangen,
auferstehen! Hör auf zu beben! Bereite dich zu leben!

（生まれ出たものは、必ず滅びる。しかし滅びたものは、必ず復活する。
震えおののくのをやめなさい！ 生きることに備えるがよい!）

この部分は、私たちに勇気と希望を与えてくれます。そうです、台湾から復興への狼煙、気炎を挙げることは、私たちにとって必要不可欠な祈念メッセージの第3弾なのです。

今日演奏するコレットの“詩篇第148篇『主を誉め称えよ』”はヴィヴァルディの“ヴァイオリン協奏曲『四季』”の中の「春」を声楽曲に編曲したものです。この詩篇は、すべて自然界にある生き物たちは創造主である主を賛美せよ、という内容で、主を賛美し、主に拠り頼み、主に希望を託して復活を期する、正に震災からの復興を祈念して、全ての生き物たちが鼓動し始める「春」に重ね合わせ、私たちが心を込めて歌い上げるにふさわしい楽曲です。

フランスのオルガニストで作曲家コレットは多作家ではありましたが、グローブ音楽事典には

「彼の音楽は安っぽく取るに足らず、オリジナリティばかりでなく、インスピレーションさえも欠如しがちである」と酷評されています。しかし彼は楽器の奏法に精通し、ヴァイオリン、チェロ、コントラバス、フルート、リコーダー、チェンバロ、ハープ、マンドリンなどの音楽教則本を書いただけでなく、何と声楽の教則本すら出版しているのです。特にイタリアスタイルのヴァイオリン奏法を書くにあたり、彼はヴィヴァルディを研究しています。その成果が「春」の声楽曲編曲に表れているのです。もっともこれとて、「元にしようと借りてきた素材を超えることはほとんどない」とやはり評価は低かったのでしたが。でも果たしてそうでしょうか。その答えはみなさまご自身がお聴きになられてお決め下さい。

ヴィヴァルディといえばオペラ作曲に熱を上げていたということをみなさまはご存知でしょうか。彼は著名なヴァイオリニストを父にもって生を受けましたが、教会学校に入ってヴァイオリンを学ぶと同時に聖職者の道を選びました。ところが生まれつきの喘息持ちだったので、結局司式ができなくなり音楽家となったのでした。彼の生地ヴェネツィアには史上一番早く一般民衆に開放された公共のオペラ劇場サン・カッシアーノ劇場や有名なフェニーチェ歌劇場など17もの歌劇場がありました。そんななか、音楽院の教授をしていた彼は、何と30才でオペラに目覚め、以後三十数年間オペラ作曲に勤しみます（狂います）。そして結局、聖職者にふさわしい生活をしていないという理由で教皇区から閉め出され、逃げるように（一縷の望みを持って）ウィーンへ移住しました。けれども、そこでも知己を得ることができず、まるで後世のモーツァルトのように名も知れない共同墓地に埋葬されるのです。

そんなヴィヴァルディでしたが、オペラ創作の合間に（?）書いたたくさんの協奏曲や「調和の霊感」、「四季」などは音楽史に燦然と輝く名作として今も親しまれています。かの大バッハですら憧憬の念をもって兄の書庫から盗み見をし写譜しています。現在わかっているだけで、バッハは他の作曲家の作品を生涯21曲編曲していますが、そのなかでもほぼ半数近くがヴィヴァルディの弦楽作品です。その内訳は、ヴァイオリン協奏曲4つをチェンバロ協奏曲に、ヴァイオリン協奏曲1つをオルガン協奏曲に、2台のヴァイオリン協奏曲をオルガン協奏曲に、2台のヴァイオリンとチェロの協奏曲をオルガン協奏曲に、そして私がこよなく愛聴している4台のヴァイオリン協奏曲をチェンバロに置き換えて編曲した協奏曲は、管弦楽を伴う4台の鍵盤楽器の協奏曲と

して前代未聞の史上希有な作品となっています。

ところで、考えてみれば、バッハが自国を出たことがなかったというのは大変なことです。同じザクセン州出身で後期バロックの二大巨匠であるヘンデルがイタリア修行を経てイギリスで大活躍したことをみれば、もしバッハがイタリアに行っていたならどんな作品が生まれたのか、わくわくドキドキものですね。そんなバッハもイタリアにはすごく憧れていました。特にヴィヴァルディに対する思い入れは強かったといいます。北西ドイツに住んだことがある私は、その想いがとてもよくわかります。なぜなら、夏が短く、低く陰鬱な雲がたれ込める長い冬を経験しますと、どこまでも澄み切った青い空と群青色の輝く海に面するヴェネツィアは憧れの地以外の何ものでもなかっただろうなと思うからです。本日演奏するイ長調のミサブレヴィスはバッハのミサ曲の中で一番イタリア的な作品だと私は思っています。そのなかにヴィヴァルディの影響を感ずるのは、私だけでしょうか。

フェラインは今年35才になります。今の会員の半数以上がまだ生まれていない年にフェラインは誕生しました。とは言っても、日本人の平均寿命が男性79.64才、女性が86.39才であることを思えば、フェラインはまだまだひよこです。74才まで生きた孔子は、論語のなかで自らの人生を顧みていますが、40才にして不惑と称していますから、35才はまだ而立はしているものの惑いの最中というところでしょうか。しかし、昨年の想像を絶する大震災を経験しますと、いつ何時運命の女神にそっぽを向かれるかわからなくなり、そのためにも悔いのない人生を送ることが肝要と思うようになってきました。今までの足跡を検証し、今後に備える。勿論、希望と大志を持って。そうしたことから、孔子とヴィヴァルディ、バッハ、コレットの生涯にフェラインを照らし重ねて歩みを振り返ってみました。それが次の表です。

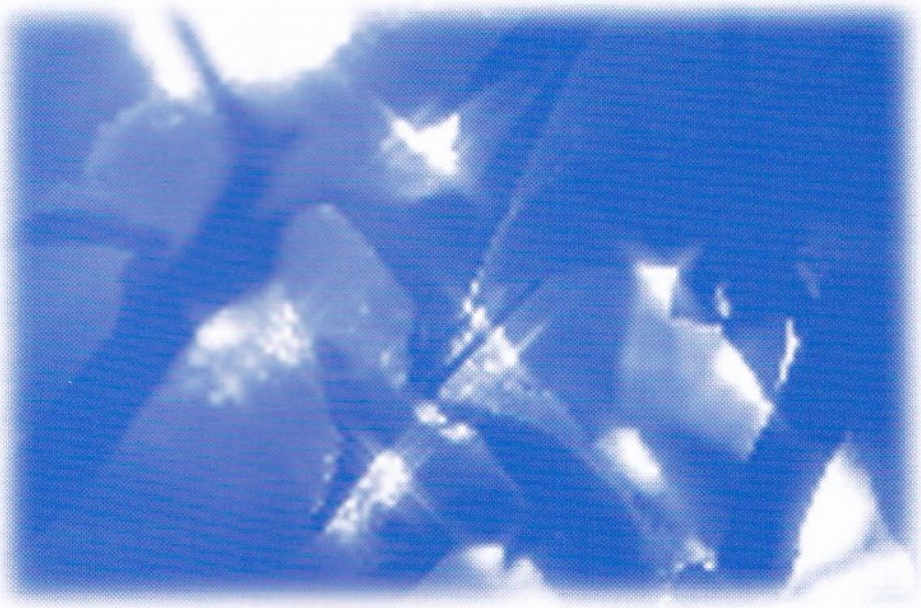
*孔子とフェライン、ヴィヴァルディ、バッハ、コレットの年譜

年齢	孔子（論語の教え）		フェライン	ヴィヴァルディ	バッハ	コレット
	1倍年暦	2倍年暦				
0	BC552		1977.2.27生	1678.3.4生	1685.3.21生	1707.4.10生
	以下、子曰く（孔子は言う）	1年で2才年を取るという考え方	「カンタータを歌う会」として発足 6.28に現呼称に改称	ヴェネツィアに生まれる 生まれつき喘息持ち 父は著名なヴァイオリニスト	中部ドイツの田舎町 アイゼナハに生まれ る	ノルマンディのルーアンで 生を受ける
8	BC544		1985	1686	1693	1715
		学問をしたいと 思うようになった	バッハ生誕300年記念 「ヨハネ受難曲」演奏会 佐々木振り歌い	サン・ジェミにアーノ 教会学校に入学 ヴァイオリンを學ぶ	父母の相継ぐ死により 10才で孤児に 長兄に引き取られる	
15	BC537		1992	1693	1700	1722
	「志学」 学問に志した	自分の考え方を 持つようになった	バッハとメンデルスゾーン 同名異曲演奏会 マタイへの足掛かり	僧籍に入る 剃髪して最下級の聖職者	リューネブルクの聖ミカエル 教会学校に。15才で自活 ヴィオラ奏者として活躍	
20	BC532		1997	1698	1705	1727
		考え方を確立させた	20周年記念演奏会 「昇天祭オラトリオ」他 Thomas-Kantorロッチュ指揮	司祭に叙任 喘息の悪化で司式できず	ヴァイマール宮廷楽団 ヴァイオリン奏者とて採用 M.バーバラと婚約	聖マドレーン教会 オルガニスト 最初のソナタを発表
25	BC527		2002	1703	1710	1732
		自分は何をすべきかを 知ることとなった	25周年記念演奏会 バッハとブラームス カンタータとモテット演奏会	ビエタ音楽院教師 ヴァイオリンを教授 「調和の霊感」出版	ヴァイマール宮廷礼拝堂 オルガニスト兼務 オルガン名曲を数々作曲	モリセと結婚 サンジェルモン劇場と契約 25の協奏曲作曲
30	BC522	BC522	2007	1708	1715	1737
	「而立」 自信がつき自立 できるようになった	人の意見が 聞けるようになった	30周年記念演奏会 「ヨハネ受難曲」 ヴィンシャーマン指揮	オペラ作曲家活動開開始 ヴェネツィアで10以上上演	ケーテンの宮廷楽長就任 器楽曲を数多く作曲 裕福な時代	テンプル聖マリー教会 オルガニスト オルガン曲を出版
35	**BC517**		**2012**	**1713**	**1720**	**1742**
		心の思うまま動いても 道を外さなくなった	**35周年記念演奏会 イタリアバロックの煌めき バッハとヴィヴァルディ**	マントヴァの宮廷楽長に オペラ創作に意欲	妻バーバラの死 突然の悲報 ブランデンブルク協奏曲寄贈	パリ・イエズス会の大学 オルガニスト
40	BC512		2017	1718	1725	1747
	「不惑」 心に惑いが なくなった			サンタンジェロ劇場 作曲家兼音楽監督 「四季」作品8等出版	A.マグダレーナと再婚 ライプツィヒ聖トマス教会 カントールに	ヴァイオリンとチェンバロの ためのソナタ出版
50	BC502			1728	1735	1757
	「知名」 天の使命を自得、 知り得るようになった			ローマ、プラハでオペラ 上演	校長等上司と対立 ザクセン選帝侯から 宮廷作曲家の称号を受ける	音楽会を企画 教則本、教育者 イタリア音楽を普及
60	BC492			1738	1745	1767
	「耳順」 どんな話が聞こえても 動揺しなくなった			オペラばかり創作ゆえ 教皇領フェラーラへの 立ち入り禁止	フリードリヒ2世に 「音楽の捧げもの」を献上 失明、脳卒中で危篤	ヴィヴァルディ「春」 編曲出版 宗教曲を書く
70	BC482			1741没（63才）	1750没（65才）	1777
	「従心」 すべての行動が規範 から外れなくなった			憧れの地ウィーン到着 病悪化で死去		アングレーム公爵に オルガニストとして仕える 不当に過小評価
80	BC479没（73才）					1787
						ルイ15世の下 アマチュアに音楽を普及 パリに没す
						1795（87才）

“Bach war kein Bach, sondern ein Meer.”「バッハは小川にはあらず、大海である」と言ったのはベートーヴェンでしたし、**"Alle Schulen fließen in Bach, und alle Schulen werden von Bach geschaffen"**「すべての流派はバッハに注ぎ、すべての流派はバッハから生まれる」ともよく言われます。

私たちフェラインは、これらの信念と観点から様々な国の様々な音楽を様々な指揮者とやってきました。しかし震災で痛手を受けた今、もう一度原点に返ってカンタータを勉強しようと思います。「五行説」の青春に立ち返り、論語の「志学」ならぬ「志バッハ」でもってリスタートを切りたいと思っています。被災された方々の復興に寄せる熱き思いと希望に寄り添いながら。カンタータの演奏会は来年（2013年）1月13日です。4番、102番、61番、93番を演奏します。ご期待ください。

さてさてフェライン40周年は何をやるのかな？　私はすでに定年しているかな？



盛岡バッハ・カンタータ・フェラインの歴史

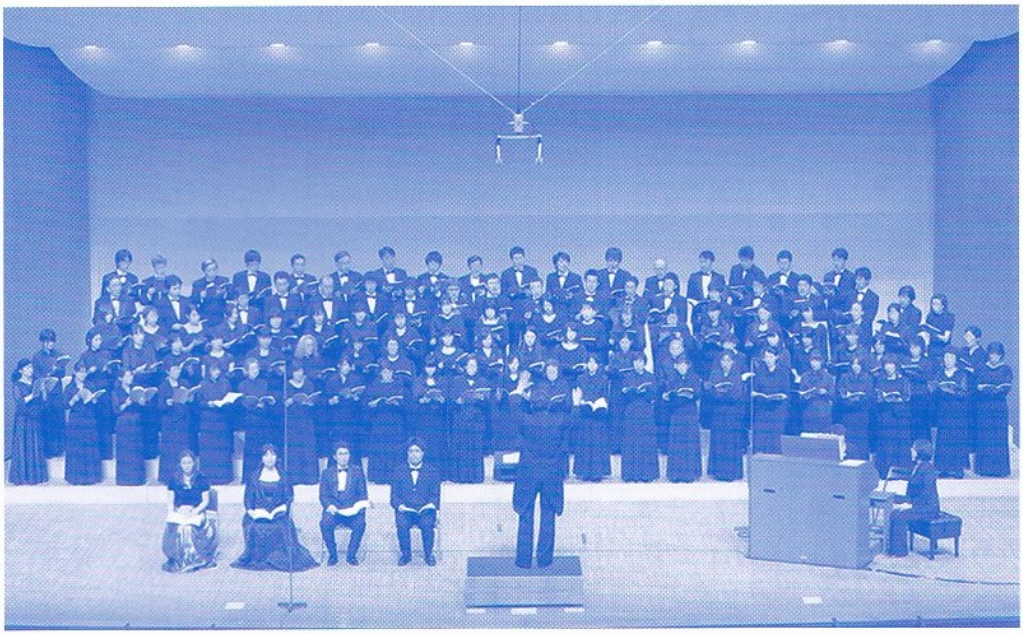
1977年に結成以来「J.S.バッハの教会カンタータの研究と演奏を通して音楽芸術を追求する」ことを目的として、これまで、35年間活動を続けてきました。主な演奏会と演奏旅行の経過は以下のとおりです。

年	月日	演奏会名	曲目	指揮者等
1977年	2月27日	「カンタータを歌う会」として発足		
	6月28日	「盛岡バッハ・カンタータ・フェライン」に改称		
1978年	2月26日	「バッハコンツェルト」	カンタータ45番、147番	指揮：小林道夫 （芸大と共演）
1979年	10月 6日	「BACH ABEND」	カンタータ 158番、131番	指揮：小林道夫
1980年	2月27日	「バッハの夕べ」	カンタータ80番	指揮：小林道夫 （芸大と共演）
	12月22日	この年より「チャリティー・コンサート」を、盛岡市内のバロック音楽愛好家グループと共催(～1997年)		
1981年	7月 4日	「BACH ABEND」	カンタータ 195番、182番	指揮：小林道夫
1982年	11月22日	「バッハの夕べ」	カンタータ 158番、4番	指揮：佐々木正利
1985年	3月16日 17日	J.S.バッハ生誕 300年記念演奏会 「ヨハネ受難曲」	ヨハネ受難曲	指揮：佐々木正利 （仙台宗教音楽合唱団と合同演奏）
	11月 3日	仙台北教会宗教音楽の夕べ「メサイア」	メサイア(G.F.ヘンデル)	指揮：佐々木正利
	11月29日	G.F.ヘンデル生誕 300年記念演奏会「メサイア」	メサイア(G.F.ヘンデル)	指揮：佐々木正利
1986年	4月11日	「宗教音楽の夕べ」	ドイツ・レクイエム (H.シュッツ)ほか	指揮：佐々木正利
	4月~5月	第1回ドイツ演奏旅行	ドイツ・レクイエム (H.シュッツ)ほか	指揮：佐々木正利
	7月11日	「東京ゾリステン演奏会」共演	スターバト・マーテル （ペルゴレージ）	指揮：赤松 安
1987年	3月28日	創立10周年記念演奏会「カンタータの夕べ」	カンタータ34番、70番、102番他	指揮：佐々木正利
	11月27日	ムシカ・デラルテ・トウキョウ演奏会 「バロック音楽の夕べ」（主催）		
1988年	3月12日 13日	仙台宗教音楽合唱団との合同演奏会 「ミサ曲ロ短調」	ミサ曲ロ短調	指揮：佐々木正利
	9月17日	「今仲幸雄バリトンリサイタル」（主催）		
	11月17日	「ミヒャエル・ショッパーバリトンリサイタル」（主催）		
1989年	4月24日	「二重合唱の夕べ」	モテット2番、5番 （J.S.バッハ)他	指揮：佐々木正利
1990年	3月10日 11日	盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、 仙台宗教音楽合唱団合同演奏会	クリスマス・オラトリオ4～6部、 ミサ曲ヘ長調(J.S.バッハ)	指揮：佐々木正利
	10月 1日	「アグネス・ギーベル 佐々木正利 ジョイントリサイタル」（主催）		
	12月～ 翌1月	第2回ドイツ演奏旅行	クリスマス・オラトリオ他	指揮：C.ポッペン 佐々木正利
1991年	3月10日	ドイツ演奏旅行帰国演奏会	モテット1，2番(J.S.バッハ)他、 ブクステフーデ、シュッツ	指揮：佐々木正利
	10月14日 18日	「カンタータ第140番、コーヒーカンタータ」	カンタータ140番、コーヒーカンタータ	指揮：H.ヴィンシャーマン （ドイツ・バッハゾリステンと共演）

1992年	3月21日	「バッハとメンデルスゾーンのカンタータの夕べ」	カンタータ93番他	指揮：佐々木正利
1993年	10月20日 24日 29日	「マタイ受難曲」（盛岡、仙台、岡山、東京）	マタイ受難曲（J.S.バッハ）	指揮：H.ヴィンシャーマン (ドイツ・バッハゾリステンと共演)
1994年	7月25日	「カンタータ147番」 仙台バッハアカデミーに出演	カンタータ147番	指揮：佐々木正利 (仙台フィル・バッハアンサンブルと共演)
	12月18日	弘前市民クリスマス： G.F.ヘンデル「メサイア」演奏会に出演	メサイア（G.F.ヘンデル）	指揮：佐々木正利
1995年	4月末～ 5月	第3回ドイツ演奏旅行	天地創造（J.ハイドン)他	指揮：ヨセフ・ツィルヒ 佐々木正利
	8月26日	一関・東日本合唱祭参加	モテット6番他	指揮：佐々木正利
	9月26日	劔持清之・トリオフィオリーレ 「モーツァルト室内楽の夕べ」（主催）		
	10月 8日	青山町教会チャペルコンサート	天地創造抜粋(J.ハイドン)他	指揮：小原一穂
	11月22日 23日	「天地創造」（盛岡、仙台） オーケストラ・アンサンブル金沢と共演	天地創造（J.ハイドン）	指揮：岩城宏之
1996年	3月15日	「バッハの夕べ」演奏会	カンタータ21,131番、モテット4番	指揮：佐々木正利
1997年	4月13日	20周年記念演奏会	昇天祭オラトリオ マニフィカトほか(J.S.バッハ)	指揮：H.J.ロッチュ 佐々木正利
1998年	11月20日	「ヴィンシャーマンのロ短調ミサ」演奏会 盛岡コーロ・デラ・パーチェと共演	ミサ曲ロ短調（J.S.バッハ）	指揮：H.ヴィンシャーマン (ドイツ・バッハゾリステンと共演)
	12月12日	「盛岡いのちの電話」 チャリティーコンサート	カンタータ151番,191番 讃美歌数曲	指揮：佐々木幹雄
1999年	4月20日	シュッツのダビデ詩篇と バッハ、メンデルスゾーンのモテットの夕べ	ダビデ詩篇曲3曲（シュッツ） モテット3番(J.S.バッハ) モテット3曲メンデルスゾーン	指揮：佐々木正利
	11月11日 12日	第4回ドイツ演奏旅行 ケンペン・プロブスタイ教会 ボン・ベートーヴェンホール	ミサ曲ロ短調(J.S.バッハ)	指揮：H.ヴィンシャーマン (ドイツ・バッハゾリステンと共演)
	11月14日	インゲルハイム・ザール教会	ダビデ詩篇曲3曲（シュッツ） モテット3番(J.S.バッハ) モテット3曲メンデルスゾーン	指揮：佐々木正利
	12月22日	「盛岡いのちの電話」 チャリティーコンサート	モテット、三つの宗教的な歌ほか（メンデルスゾーン） オルゲルビューヒライン（J.S.バッハ）	指揮：佐々木正利
2000年	11月23日	クリスマス・オラトリオ全曲演奏会	クリスマス・オラトリオ(J.S.バッハ)	指揮：H.ヴィンシャーマン (ドイツ・バッハゾリステンと共演)
2001年	3月13日	「盛岡いのちの電話」開局10周年記念 チャリティーコンサート	十字架上のイエス・キリストの七つの 言葉(シュッツ)他	指揮：佐々木正利
	8月11日 12日	岡山バッハカンタータ協会主催ドイツ演奏旅行 に有志(24人)同行参加 ライプツィヒ・聖トーマス教会聖歌隊席 クヴェトリンブルグ・シュティフツ教会	カンタータ39番,102番,158番, モテット6番(J.S.バッハ)	指揮：D.ティム (ライプツィヒ・バロック オーケストラと共演)
	10月16日	クルト・マズア指揮ロンドンフィル ベートーヴェン「第九交響曲」演奏会	交響曲第9番「合唱」（ベートーヴェン）	在京のバイオニア合唱団 と共演
2002年	1月13日	25周年記念演奏会	モテットOp.29,74(ブラームス) カンタータ150番,184番,39番（J.S.バッハ）	指揮：佐々木正利 (東京バッハ・カンタータ・アンサンブルと共演)
	10月 4日	ライプツィヒ・バロックオーケストラ演奏会	カンタータ45番(J.S.バッハ) グローリア 二長調（ヴィヴァルディ）	指揮：D.ティム (ライプツィヒ・バロックオーケストラと共演)
	12月 3日	鳴海真希子さん追悼演奏会	ヨハネ受難曲から第39,40曲 （J.S.バッハ）	指揮：佐々木正利

2002年	12月22日	久慈・こはくのまち第九演奏会	交響曲第９番「合唱」(ベートーヴェン)	指揮：石川善美 東北大学交響楽団　久慈市民第九合唱団と共演
2003年	11月30日	マタイ受難曲演奏会盛岡公演	マタイ受難曲（J.S.バッハ）	指揮：H.ヴィンシャーマン (ドイツ・バッハゾリステンと共演)
	12月 5日	マタイ受難曲演奏会東京公演	マタイ受難曲（J.S.バッハ）	指揮：H.ヴィンシャーマン (ドイツ・バッハゾリステンと共演)
2004年	7月 28日 30日 31日	仙台宗音、岡山バッハカンタータ協会、 高知バッハカンタータフェライン主催の ドイツ演奏旅行に有志(38人)参加 アイゼナッハ・聖ゲオルク教会演奏会 アイスレーベン・聖アンドレアス教会演奏会 ライプツイヒ・聖トーマス教会演奏会	カンタータ131番、21番 （J.S.バッハ）	指揮：D.ティム (ライプツィヒ・バロックオーケストラと共演)
2005年	1月30日	マルコ受難曲演奏会	カンタータ106番、79番、105番 マルコ受難曲　　（J.S.バッハ）	指揮：佐々木正利
	4月15日	シュレスヴィッヒ・ホルシュタイン・アカデミー合唱団 盛岡公演 （盛岡バッハ・カンタータ・フェライン共演）	羊飼いの歌ほか(メンデルスゾーン) アヴェ・マリアほか(シューベルト) 婚礼の合唱ほか(ワーグナー) 流浪の民(シューマン) 赤とんぼ(山田耕筰)	指揮：佐々木正利 ロルフ・ベック
	12月 27日 28日 30日	第５回ドイツ演奏旅行 ミュンヘン・ヘラクレスザール グラーフィング・シュタッドプファール教会 デットモルト・ノイエアウラ	 メサイア/ドイツ語版(ヘンデル) クリスマス・オラトリオⅠ～Ⅲ部 （J.S.バッハ） 交響曲第９番「合唱」(ベートーヴェン)	指揮：G.シュマールフス
2007年	1月28日	ヨハネ受難曲演奏会	ヨハネ受難曲　（J.S.バッハ）	指揮：H.ヴィンシャーマン (東京バッハ・カンタータ・アンサンブルと共演)
	6月 3日	飯靖子・佐々木正利ジョイントリサイタル（主催）		
	12月21日	盛岡市民文化ホール開館１０周年記念 マーラー「復活」演奏会 合唱団として出演した「復活公演祝祭合唱団」に 有志98人が参加	交響曲第２番「復活」　（マーラー）	指揮：飯森範親 (東京交響楽団と共演)
	12月23日	台湾「クリスマス・オラトリオ」演奏会 長榮交響楽団：主催　仙台宗教音楽合唱団、岩手大学 合唱団と共に有志25名が参加	クリスマス・オラトリオⅠ～Ⅲ部 （J.S.バッハ）	指揮：G.シュマールフス （長榮交響楽団と共演）
2008年	6月 1日	珠玉のカンタータ　～バッハからの贈り物～	カンタータ18番、187番、78番、 182番　　（J.S.バッハ）	指揮：佐々木正利 (東京バッハ・カンタータ・アンサンブルと共演)
	12月 30日 31日	スイス演奏旅行　合唱団として出演した「2008スイス・ ジルヴェスター祝祭合唱団」に有志(39名)が参加 チューリッヒ・ヤコブ教会 バーゼル・クララ教会	マニフィカト　（ブクステフーデ） カンタータ　　（テレマン） 他、シュッツ、賛美歌等	指揮：佐々木正利
2010年	1月 31日	リリング・ロ短調ミサ盛岡公演	ミサ曲ロ短調BWV232 （J.S.バッハ）	指揮：H.リリング (オーケストラ・アンサンブル金沢と共演)
	10月11日	花巻温泉チャペルコンサート		指揮：佐々木正利
	12月25日	東フィル・第九演奏会	交響曲第９番「合唱」 （ベートーヴェン）	指揮：D.エッティンガー (東京フィルハーモニー交響楽団と共演)
2011年	6月19日	東日本大震災の犠牲者に捧ぐ モーツァルト・レクイエム演奏会	交声曲「主よあわれみ給え」より （大中寅二） モテット2番　　（J.S.バッハ） レクイエム・ニ短調（モーツァルト）	指揮：佐々木正利

なおこのほかにも、クリスマス・チャリティーコンサート、チャペルコンサート、合唱祭、新春コーラスコンサートなどに参加、出演しています。



東日本大震災の犠牲者に捧ぐ「モーツアルト・レクイエム演奏会」2011.6.19

演奏会運営スタッフ

マネージャー	トータル	茂木　容子（全般）	プログラム	昆野志穂・中村美咲・金成佳枝
	チーフ	渡辺　信之（企画、印刷）	楽譜	堀川　佑也・及川　慧子
	サブ	岩渕　絵里（会計）	対訳	若林　敦盛
	学生リーダー	磯沼　佳世（宣伝）	ステージ	田沢　隆・中野　奏保
	学生サブリーダー	昆野　志穂（印刷、広告）	受付	赤塚貴史・千田絵未・菊池敦子
会計	全般	伊藤愛・岩渕絵里・猪狩裕海		米内恵里奈・秋元美奈子・茂木史
	チケット販売	平野亘・猪狩裕海・伊藤愛・渡辺しをり	楽屋	原　穂波・熊谷　沙也加
渉外	ソリスト、管弦楽	田口真澄・堀川佑也・及川慧子	事務局	渡辺　信之・岩渕　絵里
	HP・アンケート	青瀧　憲子	印刷、製本	三澤印刷
	宣伝	磯沼佳世・小菅悠樹・青瀧憲子	録音	IBC開発センター
	外部対応	磯沼佳世・小菅悠樹・渡辺しをり	写真	カメラのキクヤ

《合唱出演者》

【ソプラノ】

青瀧　憲子　●赤塚　温子　◎阿久津　巴　磯沼　佳世　板宮　渚　伊藤　愛　伊藤　律子*
梅木　奏美　大石　敦子　大矢　克子　小笠原香澄　岡野美映子　金成　佳枝　菊地明日香
菊池　澄子　菊池　節子　熊谷沙也加　熊谷　充代　昆　千晶　昆野　志穂　斎藤　純子
○佐々木恵利子　佐藤　澄江　佐藤眞理子*　○高橋　沙綾　◎高橋　知子　高橋みずき　田口　真澄
田中　結香　千田　絵未　角掛　友喜　中村　夏実　中村　美咲　奈良めぐみ

【アルト】

猪狩　裕海　○一守奈那子　○岩渕　絵里　及川　慧子　大友　利恵*　★●小川暁美　小川　睦子
小野寺洋子　◎柿崎　泉　金子　千鶴　桐原　絹子　小坂　文代　佐々木美智子　佐藤　公
鈴木　英美　李沢　有希　◎田口　千紗　外崎　麻子　中　瑞穂　原　穂波　平井　良子
茂木　容子　渡辺しをり

【テノール】

○伊藤　陽平　太田　穎則　小川　隆弘　○勝部　健作　加藤　照道　★佐々木幹雄　中野　奏保
☆◎新山隆健　◎西野　真史　沼田　臣矢　堀川　佑也　三原　正敏　●吉村　哲

【バス】

赤塚　貴史　阿部　学　宇津野智成　小野寺雄紀　★小原　一穂　○小菅　悠樹　●佐藤　和久
田沢　隆　千田　敬之　遠山　徹　◎芳賀　郁夫　◎平野　亘　渡辺　信之

〖指揮者〗　佐々木正利

〖伴奏者〗　平井　良子　千田　絵未　柿崎　倫史

《凡　例》

★　コンサートマスター／ミストレス
☆　アシスタント・コンダクター
●　総括リーダー
◎　パートリーダー
○　サブパートリーダー

*　仙台宗教音楽合唱団

次回演奏会の予定

2013年1月13日(日)
盛岡市民文化ホール(マリオス)大ホール
チケット発売予定:10月

【指揮】
佐々木正利

【管弦楽】
東京バッハ・カンタータ・アンサンブル

【合唱】
盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

【曲目】
J.S.バッハ作曲

カンタータ第4番『キリストは死の縛めに捕われました』
BWV4 Christ lag in Todesbanden

カンタータ第102番『主よ、あなたの目は信仰を顧みます!』
BWV102 Herr, deine Augen sehen nach dem Glauben!

カンタータ第61番『今こそ　来てください、異邦人の救い主よ』
BWV61 Nun komm, der Heiden Heiland

カンタータ第93番『ただ愛する神の支配にまかせる人』
BWV93 Wer nur den lieben Gott läst walten